# The Aim of Lifelong Integrated Education

## 翻訳その2　－生涯教育のめざすもの－

（財）野村生涯教育センター理事長野村佳子氏講演集より

足利市教育委員会・社会教育課　清　水　邦　康

### ―はじめに―

昨年度「教育論文集」に，The Aim of Lifelong Integrated Educationのうち，5節を翻訳，寄稿させていただいた。本稿は，その継続として，2節を翻訳したものである。

生涯教育の推進を，実践させていただいている私にとって，この翻訳作業は，一つの学習であるし，その深い理念に触れられることは，大きな喜びでもある。

この野村生涯教育センターの存在は，実は，民間の団体としての活動に大きな意義が見出される。

理念が，行政レベルで示されたものでなく，多くの実践を通して脈々と流れている深い哲学であることは，行政職員である私にとっては，新鮮なものと感じる。

前年度の訳でもおわかりいただいたと思うが，生涯教育を「人間教育」として位置づけ，人間の原点に立ち返る手段として位置づけている理念には，単に教育の方法論をのりこえた深みを感じるのである。

ここでは，まず，このセンターの主張の中心である「生涯教育への願い」を引用させていただくことにしたい。この主張を理解していただくことによって，以下に続く翻訳の部分への諸先生方の理解がより容易になるのではないかと考えたからである。

### 生涯教育への願い

人間社会における政治・経済・教育の諸機能において，人間がその諸機能の担い手である限り人間の教育が第一の出発点になるべきです。

まして人類史上，今ほど大きな転換期を迎えている世紀はないと思われます。人間性の復活，平和社会の実現，地球的レベルにおける新しい文明の創造が希求されているこの時代，そして人類が共滅から共存への道を見出さなければならないこの時代にあたって，人間教育がすべてに優先し，抜本的な見直しがなされなければならないと思います。特に青少年の非行や自殺，暴力等未来を失った彼らの姿に教育のゆきづまりを痛感いたします。

人間が人間らしくあるための教育が，人間不在になっている今，教育の原点に立ち還る必要を感じます。それはつまり，「人間とは何か」「生きるとはどういうことなのか」という人間の原点本質にまでさかのぼらない限り，結局は単なる手直し，方法論に終るのではないかと思うのです。

人間の教育は特定の限られた専門家だけの問題でなく，むしろ人生の最初の教師，生涯を通しての教師は，その生命を生み，育て，守る親であり，特に母親であることを思い，そしてまた生涯にわたる人間形成，自己実現は，一人一人の己れの問題であることを思うとき，真の人間教育のあり方は，生涯教育の最大のテーマであり，今世界が探し求めているものであろうと考えます。

私どもはこの観点に立って，教育の本質を人間性の開発に求め，東洋の人間観，自然観に基づいた生涯教育の基本理念を打ち立てました。

その基本理念において，家庭，学校，社会の有機的連帯のもとに人間形成をはかり，自己教育を通し，相互教育をはかりつつ，地球的レベルの連帯にまで拡大することによって，人間復活の教育が確立され，今世界が模策している人類共存の文化の創造がなされることを確信し，その学習と生活実践を提唱し推進したいと思います。

## ―翻　　訳―

〔生命の永遠さ　Eternity of Life〕

生涯教育においては，人間の「生命」というものを最も重視したい。

そこで，私は，「生命」の意味につき少し探究することにする。

人間が生命をもっている限り，教育は人間教育を意味すると思う。現代教育の問題点を考えてみるとき，私たちは常に，教育の目的とは何か，という点の再確認から出発しなければならない。

しかしながら，実は残念なことに，私たちは教育の本当の目的を気づいていない。だれもが，よい仕事，より高い地位，そしてより良い生活を得るために良い学校へ行こうとしている。このことが，子どもたちが，よい学校に入るため一生懸命勉強しようとする理由にもなっている。これが，勉強する本当の目的となり得るのだろうか。教育の目的のみならず，その意味までもがゆがめられているのではないだろうか。現在の教育の力点は，試験を通るために必要ないくつかの科目にのみ置かれているのではないだろうか。

私たちは，教育の真の意味を，いま取り戻さねばならず，そして現代教育がかかえている諸問題を正さねばならない。

この目的のため，教育をつぎの視点から見直さねばならないだろう。

- 知育偏重教育から全人的教育へ
- 知識の教育から知恵の教育へ
- 時限教育から生涯教育へ
- 伝統文化学習から文化創造のための教育へ

教育への少しばかりの修正は，現在の社会悪を決して解決することにならない。まず私たちは，教育の原点に立ち戻らなければならない。表面的知識の蓄積や技術の修得は，最高の教育ではない。

人間教育の真の本質は，基本的な人間の価値や深い人間性の追求にあると思う。これが，私たちが「生命の永遠さ」を生涯教育の重要な要素として指摘しておきたい理由である。

今日，私たち人間は，しばしば戦争をおこしたり，あるいは人間らしく扱われないことがある。

その事実は，社会の破壊を招いている戦略武器開発の絶えることのない文明国―― 高度発展国にみられている。それらの国々は，高度発展国と呼ばれることに本当に満足しているだろうか。

ある人々は，これは政治の問題であり，政治家や軍人にまかせるべき問題である……という。しかし，私はこのような姿勢には同意できない。これは私たちすべてに普偏的にかかわってくる問題なのである。私たちのそれぞれが，そしてすべてがこの問題を直視し，その問題解決を見出すことに参加すべきである。

人間の生命は，今日，軽んぜられている。戦争，テロ，暴力，堕胎，子殺しなどの事実は，なんと人間の生命の価値が無視されているかを示している。

生命の価値への人間としての感情を回復することなしに，人間教育は私たちのものとなり得ない。

私たちが必要としているのは，教育技術・方法論の修正でなく，むしろ人間の価値を認識し，人間社会を復活させる教育のあり方，そのものなのである。この目的に本質的にかかわってくるのが，継続教育であり，統合教育であり，また生活の教育化，そして人間の尊厳と生命の永遠さを喚起する教育なのである。

私たちは自分自身の生命の価値に気づくと，他の人々の生命の価値をも認識し，そしてお互いに尊敬しあうようになる。そこに接近するのが本当の人間教育なのであり，知識，技術の修得に限定された教育とはちがう，と思う。いうまでもなく知識は重要な資産となり得るし，またその無知は悪であるともいえる。しかし，何が重要なのかといえば，人が獲得した知識をいかに有効に利用するかという点であるし，知識を私たちの人生を導いてくれる方法，そして他の人々との交わりの方法として同化させるかという点である。

知識が社会を正しい方向へ導くものとなったとき，それは「智恵」となる。

〔人間の尊厳――その矛盾　Human Dignity－It's Contradiction〕

世界の国々における教育活動の段階は，3段階に分けられるだろう。

いまだ教育水準の低い発展途上国は，初等教育の普及と文盲をなくすことに焦点を合せている。

世界の成人人口の半数近くが文盲であることはすでに知られていることである。この段階は教育の発達過程の最初の段階である。

第2番目の段階は，教育の機会均等をはかっている国でみられている。

これらの国々のうちいくつかでは，この問題解決のため生涯教育を位置づけている。

第3番目の段階は，ヨーロッパ諸国，アメリカ，日本など教育水準の高い国々でみられる。初等教育の普及がおくれていたり，国民間の教育水準較差の大きい国々と日本を比較すると，我が国は義務教育から高等教育まで非常に発達しているといえる。しかしながらこの事実は，我が国が教育を量から質へと転換させる必要も示している。もし私たちがこのことを理解しなければ，

日本における社会問題，青少年問題は解決せず，次代をになう人々の将来は憂慮されるものとなるだろう。未来への見通しが暗いものになることは辛く，残念なことである。それ故，私たちは教育の本質，そして唯一の価値を認識し，教育を量から質へと転換することによって，この暗い将来を破らねばならない。

すなわち，教育の本質的内容を形成しなければならないのである。

子ども，成人を含めただれに対しても，この事実を説明する最も簡単な方法，それは，「私たちは一つの生命によって息づいている人間である」という事実をしっかり認識させることなのである。

この事実に気づかない人は，たとえ知識があり，高い教育を受けたとしても，全く人間としての価値がないということになる。

この世の中で最も価値のあるものは何だろうか？　私たちは人生において本当にかけがえのないものを追い求めているのだろうか？

今日における教育のテーマとして，これらの疑問をなげかけるべきだ，と私は信じている。

私たちはこの世の中に存在しているけれど，その生命は誕生により始まったものでなく，受けつがれ，そして支えられてきたものであろう。別の言葉でいえば，自分の両親がいたから自分が存在するし，両親の存在はその両親によるものなのである。基本的で，当り前なこの人間の存在理由はここにある。生命の起源から受けつがれてきたこの事実によって，私たちは現在生命をもってここにいるのである。

かっての「教育勅語」は，日本の教育における指針であった。今日我々には「教育基本法」がある。

教育勅語は，明治時代から第２次世界大戦敗北にいたるまで，我が国教育の核心の位置を占めていた。そして，それはじゅ教と神道の教えを中心理念としていた。当時の日本は，豊かな国家づくりのため国民の力を結集しなければならなかったし，現在の開発途上国と同じように国家意識の創造をはからねばならなかった。「国家意識創造」の時代を通しての努力の結果，我が国は外に眼を向け，国際的視野をもって成熟期へと達しているのである。

第２次大戦後「教育勅語」は影響力を失った。そして平和憲法を基本とした「教育基本法」が現われたのである。この基本法の中心理念は，人間の尊厳の尊重，そして国際的視野の拡大をはかることを中心理念としている，とみるべきだろう。

私はこの教育基本法の真の目的は，自己開発力の完成であり，人間の尊厳の尊重であり，そして世界平和と人類の福祉に貢献できる人材の育成にある，と信じる。

しかし，私たちはここでもう一度，私たちが本当にこの教育基本法の哲学を，このように解釈しているかどうか考え直してみるべきである。

私たち自身の教育への姿勢が，この教育基本法の精神を反映したものであるだろうか？

世界の平和が主張され，そして原水爆禁止運動は盛り上がりを見せる。だが，人類の将来のためのそのような運動のなかにも衝突がおきているのである。

人々は平和と人類の尊重を主張しながら，一方で斗いと殺りくをくり返している。

なぜ私たちはこの矛盾を直視できず，このような問題の根源に対して疑問をもたないのであろう。

社会全体に鋭いメスを入れ，そして私たち自身のなかにもメスを入れる必要があるのではないだろうか。もし私たちが人類の尊重を叫ぶなら，まず最初に自分自身を見つめる必要がある。そして，私たち自身がどう人生を歩んできたか，同じく他の人々にどうかかわり合ってきたか，を深く考えてみなければならない。

富や高価な宝石ではとってかわれない「生命の価値」を認識しなければならない。

地球上の各人の生命は最も貴重なものであるにもかかわらず，本当に私たちはこの真実をわかっていたろうか。今日まで，その事実を社会全体が認識せず，さまざまな矛盾が疑問をもたれずに置き去りにされていたとするなら，人類の平和は決して真実にはならない。

私は教育活動のなかで，このゴールをめざしたい。

## —あ と が き—

以上が今回ご紹介した2節である。この部分は前回ご紹介した，この野村生涯教育センターの基本的な3つの主張，いわば方法論としての「偏向教育から全人教育へ」「知識の教育から智恵の教育へ」「時限教育から生涯教育へ」の基盤となっている思想とみてよいだろう。とりわけ後段の部分において，教育基本法の目的をふまえて，人類の平和のための教育を主張，そしてさらにその目的達成のため自分自身を深くみつめる必要性を説く部分は，生涯教育の推進，あるいは自分たち自身の生涯にわたっての学習の必要性への鋭い接近と感じる。学習は究極的には個人の問題であり，またある面では個人に帰する。とすれば，我々がまず自分自身を深くみつめることが学習の出発点といえないだろうか。そして学習こそ人間性開発の大きな要素となり得る。

野村生涯教育センターの存在意義は，確固たる哲学に立脚した教育原理をふまえ，日常の生活のなかで実践をする，そしてそのことが自分自身の陶冶となり，なおかつ人類愛に根ざした世界平和へ貢献していくという教育活動の展開にある。

私は原文にふれながら，教育の深遠さを感じた。実践としての生涯教育活動を展開していながら，実は表面的にしか理解していなかったのではないか，という自省の念さえも抱く。

全ての教育活動の本質は人間性の開発にある，という基本を，再びそして新鮮なものとして認識させられたのである。

（出典・引用）

・The Aim of Lifelong Integrated Education part Ⅲ
・野村生涯教育概要（１９８４年度版）　野村生涯教育センター